

# 高知大学医学部医学科同窓会会報

# やまもも

高知大学医学部医学科同窓会  
会長 廣瀬大祐  
〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮  
TEL/FAX:088(866)0034  
[dosokaij@kochi-u.ac.jp](mailto:dosokaij@kochi-u.ac.jp)  
<http://www.kochi-ms.jp>

## 第22号

### 目次

《会長からの一言》		
やまもも発刊にあたって	廣瀬 大祐	2
《同窓会総会次第》		
平成24年高知大学医学部医学科同窓会		3
《会員からの一言》		
ラグビー部 30 周年	北垣 幸央	4
一緒に働いてくれませんか	真田 順子	6
高知大学・咽喉科の“えいところ”	弘瀬 かほり	8
高知大学医学部泌尿器科学教室 紹介	井上 啓史	10
近況	中平 光彦	12
命に重症心身障害児の世界にふれて	小沢 浩	14
自己紹介・病院紹介・医師募集	中谷 裕司	16
救急医療に従事し 20 年	宮内 雅人	18
近況報告	渡辺 員支	20
「元気な県庁」へ	杉原 由紀	22
卒後18年目となりました	中島 英貴	24
命に携わる小児医療	高杉 尚志	26
《同窓会事務局から》		
出血のお返事のお願ひ・住所連絡のお願ひ・会費納入のお願ひ		28
医師賠償保険団体加入のお知らせ		29

《会長からの一言》

## やまもも発刊にあたって

同窓会会長 廣瀬 大祐

昨年ほど絆という言葉が日常にあふれた年はなかったのではないのでしょうか。同窓会という組織ほどこの絆によってなりたっている組織はないのではないのでしょうか。

高知医科大学・高知大学医学へとつながる縦の絆、一緒に国試の勉強をした横の絆この糸を編む仕事と同窓会の役割と改めて考えさせられました  
今回 “やまもも” では卒業生の近況を知らせてほしいとの連絡をだしたところ数名の先生からご連絡をいただきました。急に依頼した先生方も忙しい中近況を書いていただきました。今回はラグビー部つながりが多くなりましたが次回以降もこの企画を続けていこうと考えています

皆様から近況報告、病院紹介、医師募集、趣味のことどのような内容でもかまいませんのでお寄せいただけたら幸いです

《同窓会総会次第》

## 平成 24 年高知大学医学部同窓会総会

日時 平成 24 年 7 月 28 日 午後 5 時から

場所 ホテル日航高知 旭ロイヤル

Tel 088-885-5111

参加費 5000円

### 式次第

午後 5 時 総会

議題 1 事業報告 平成 23 年度決算

議題 2 事業計画 平成 24 年度予算案

議題 3 役員改選

その他

午後 6 時 講演会

演者 神谷保彦先生（2 期生）長崎大学大学院国際健康開発研究科教授

午後 7 時 懇親会

### 高知大学同窓会会長選挙について

平成 24 年 7 月 28 日同窓会総会において次期同窓会会長の選挙があります

立候補の方は平成 24 年 5 月 31 日までに氏名、卒業年度、立候補にあたっての所信表明（約 400～800 字）をメールにて同窓会事務局までお知らせください。

《会員からの一言》

## ラグビー部30周年

高知医科大学 第1期（昭和59年）卒 北垣 幸央

平成23年9月23日、私は高知大学医学部ラグビー部創部30周年のOB戦、OB会に出席するために西宮から高知へ向かった。

一期生として入学した高知医大にラグビー部はなくサッカー部に入部。二回生からは練習、試合をさぼってサーフィンばかりしていたのでポジションがなくなりました。そこで四回生のとき、教室の後部座席を指定席とする一団でラグビー部を創部となる。まともなラグビー経験者はたった二人。ともかく早稲田と同じジャージを作り、お互いルールを知らない高知刑務所の巨体看守軍団と練習をする日々であった。試合での逸話には事欠かず、何度となく決められたノーホイッスルトライや「もうあかん」と言って勝手にグラウンドの外に逃げ出す者も出る始末。台風上陸による暴風雨警報下、泥の中での熊本西医体も思い出深いし、卒業試験を白紙で提出し当時の顧問、喜田村教授に呼び出されたのもグラウンドでラグビーボール蹴っている時だった。卒業後はラグビーもサッカーも鑑賞するだけで、循環器内科CCU勤務であったため長年OB戦に参加することはなかった。開業してしばらくした時に届いた現、ラグビー部顧問、溝渕教授からの年賀状、「たまにはOB戦に出てこい」になぜか発奮。この10年位は毎年OB戦、OB会に参加するようになった（サッカー部のOB戦も時々参加している）。出迎えや寄付金を受け取る時には直立、満面の笑顔の後輩現役学生達も試合になると豹変。愛のムチを受けて骨折（尾骨骨折、右第七肋骨不全骨折、右環指末節骨骨折）や肉離れ（腓腹筋挫傷）と毎回身体はボロボロになる。一度、高校時代のラグビー部同級生二人を連れて来たが私の悲惨な姿を見て哀れみを感じてくれた。また高知大学医学部受験に来た長男を受験前日のOB会に連れて来て飲んだのも楽しい思い出である（当然、不合格になったが）。

今回の30周年OB戦に一期生では溝渕教授、津田先生（堺市、開業）と私の三人が参加。今回は現役、OB混合でチーム作成となる。溝渕教授曰く、現役vs. OBにする

と現役が本気出すから？との提案。おかげでいつものフッカーは勘弁してもらい、ランカーかつスローワーとしてプレーすることとなった。しかしながら結果は見るも無残。例年の如く、踏まれ、蹴られ、倒されてと悲壮な状況で、ラストワンプレーのタックルで右腓腹筋挫傷となった。それにしてもやはりOB戦は楽しい。毎年のことながら後輩達と試合でぶつかる程に親密さが増してくる。夜は高知三翠園で創部30周年OB会に出席。一期生でサッカー部でも一緒だった土佐原人、岡本先生が四万十市から参加してくれた。毎度のことではあるが土佐の酒盛りは最高に楽しく、30年前の学生時代を思い出させてくれる。最後にはいつも全員肩を組んで長渕剛「乾杯」ストームで二次会はお開きになった。二次会ではええ年をした30才、40才代のOB達（一応、皆医師だと思うが）がパンツ一丁で暴れ回る姿はある意味、感動さえ覚えてしまうのは私の精神が未だに学生レベルだからであろうか。

今年も3月10日のOB戦、OB会にクリニックを休診にして参加する。家族やスタッフのみならず、西宮市医師会の皆からも「そろそろ止めといた方がええで」と言われながら。

《会員からの一言》

## 一緒に働いてくれないか

高知医科大学 第 1 期 (昭和 59 年) 卒 真田 順子

菜の花診療所は 2000 年に開業した認知症専門のクリニックです。場所は高知市追手筋。日曜市に面した医療ビルの 2 階です。1 期生の私と 7 期生の北村ゆり、作業療法士、高次脳機能検査と言語リハを担当する言語聴覚士が勤務しています。

年間の認知症関連新患者数は 450 人くらいです。それ以外にうつ病や神経症の方も来られますが、20 歳未満の若い患者さんはお断りしています。

菜の花診療所を受診する認知症の患者さんの多くは、軽度から中等度の状態の方です。鑑別診断をして、薬物治療を開始し、並行して介護保険を申請し、内科かかりつけ医やケアマネと連絡を取りながら本人と家族を支えます。鑑別診断のために必要な MRI や SPECT、心筋シンチは高知赤十字病院でおおむね 4 週間以内に検査できます。

認知症の新薬治験にも積極的に関わっています。現在進行中の Phase II III は 3 件です。2011 年に上梓されたレミニールやイクセロンパッチも Phase II から関わりました。治験を通して最新情報が常に入ってきます。他の大学の研究者との交流も自然と多くなります。

このところ私たち 2 人だけでは予約枠が満杯で、新患を 4 週間お待たせする状態が続いており、3 人目の医師を探しております。条件は、認知症を本気でやってみたい人であること。

症例数は十分あります。MRI も SPECT も 4 週間以内に撮れます。高次脳機能検査はほとんどできます。介護保険にも習熟できます。ケースワーカーがいないので、自然と地域連携を肌身で体験されるでしょう。1 年くらいの短期でも、長くパートナーとして勤務してみたい方でもご一報ください。

[nanohana@mf.pikara.ne.jp](mailto:nanohana@mf.pikara.ne.jp)

<http://www.nanohana-cl.jp>



《会員からの一言》

## 高知大学耳鼻咽喉科の“えいところ”

高知大学医学部耳鼻咽喉科

高知医科大外 第4期（昭和62年）卒 弘瀬 かほり

（旧姓 岡崎）

自己紹介を簡単にしておきます。高知出身で、医学部時代の所属クラブは管弦楽団（バイオリンとビオラ）、茶道部、水泳部のマネージャーでした。高知医科大学時代の耳鼻咽喉科教室に入局、医局の人事で高知県内のいくつかの病院へ赴任し、現在は大学に戻って勤務しています。

高知大学耳鼻咽喉科の自慢をさせてください。

“こちゃんとえいところ”が本当にたくさんあるのですが、まず、喉頭・音声・嚥下領域で全国トップクラスということです。喉頭や音声を専門とされる教室はたくさんあるのですが、音声だけでなく嚥下を専門とする耳鼻咽喉科教授は全国で現在は兵頭政光教授だけです。兵頭教授考案の嚥下内視鏡スコアは嚥下機能評価の診断に汎用されていますし、嚥下機能改善手術や誤嚥防止手術症例の紹介も多くの施設から寄せられています。平成24年2月には嚥下を専門とする全国学会の日本嚥下医学会学術講演会を担当、過去最高の演題応募、参加者で大盛況でした。当教室の専門性の高さから、今後、平成25年秋には日本音声言語医学会、平成26年には日本気管食道科学会と全国学会担当予定がめじろ押しです。

聴覚の領域では、小林泰輔准教授による人工内耳手術、耳内内視鏡手術も全国有数です。

耳疾患の手術治療はもちろん難聴・平衡機能障害の詳細な診断治療をおこなっています。

高知県の新生児聴覚スクリーニング後の精査施設でもあり、小児難聴の診断や小児人工内耳手術も手掛けています。

紙面の都合でここまでにしますが、これは教室の“えいところ”のほんの一部です。



私たち医局員も“門前の小僧”で、様々な貴重な経験や知識を習得することができます。高知大学出身の医局員も増え、活気あるフレンドリーな教室であることも、“ちやんとえいところ”です。(ホームページものぞいてみてください。)

研修医のみなさん、“耳鼻咽喉科”を経験してみませんか！！耳鼻咽喉科以外へ入局を考えている方も、是非選択科目に選んでみてください。高知大学以外での研修でも“たすきがけ”研修プログラムで選択科目として当教室で研修された方もいます。実りある研修をお約束します。もちろん入局も大歓迎です。在学生の方は施設体験や再選択科目で来ていただければさらに“えいところ”をご紹介します。

他科に進まれた先生方、耳鼻咽喉科は他科領域との関連も多く、お役に立つことも多いと思います。また高知大学医学部の女性医師キャリア形成支援研修プログラムにも参加しており、専門性の高い研修を準備しています。どうぞお気軽お声をおかけください。

“待ちゆうきね！”

《会員からの一言》

## 高知大学医学部泌尿器科学教室 紹介

高知大学医学部泌尿器科

高知医科大学 第6期（平成元年）卒 井上 啓史

泌尿器科は外科と内科の範疇を超え他科領域と広範に接し、近年は女性泌尿器科学が注目されています。また医学史上初の内視鏡が膀胱鏡であるように、先端医療の開発も得意とするところです。本稿では、私が所属する泌尿器科学教室を紹介させていただきます。

1980年藤田幸利初代教授により、旧高知医科大学泌尿器科学教室として開設され、1995年執印太郎第2代教授の就任後はや16年。円熟期を迎え、我々スタッフの情熱は留まる所を知りません。

教育では、泌尿器科学を介して豊かな人間性と確固たる倫理観を基盤とし、高度な知識と技術を兼ね備え、生涯に亘り知識と技術を探求し実践する医療人の育成が目標です。さらに昨年より地域医療人の育成支援活動「高知県泌尿器疾患レジデントセミナー」を開催し卒業教育にも注力しています。

臨床では、EBMに基づく全人的医療を実践し先端医療開発を目指し日夜研鑽しています。

まず外科治療では、経尿道的手術や体腔鏡下手術など低侵襲治療が過半数を占めます。体腔鏡下手術としては、副腎や腎の腫瘍だけでなく、昨年前立腺癌に対する腹腔鏡下前立腺全摘除術が保険適応の施設認定を取得し、さらに膀胱癌に対する腹腔鏡下膀胱全摘除術が第2項先進医療として厚生労働省に承認されました。経尿道的手術としては、2004年国内初の臨床試験として膀胱癌に対する光力学診断を導入しました。現在は厚生労働省第3項先進医療(高度医療)、医師主導治験として実施中であり、前立腺癌の術中診断としても高度医療に申請中です。さらに内視鏡手術支援ロボット「ダ・ヴィンチS」の導入も検討中です。

また放射線治療では、前立腺癌に対して一般的な外照射療法だけでなく、イリジウム 192 高線量率組織内照射療法やヨウ素 125 シード線源永久留置による密封小線源治療、強度変調放射線治療など国際水準の治療を行っています。

その他腎癌に対する経皮的ラジオ波焼灼療法や分子標的治療、腎癌や尿路上皮癌に対する癌ワクチン療法など QOL 重視の治療も行っていきます。また難病の遺伝病 von Hippel-Lindau (VHL) 病の厚生労働省研究班も設立し活動中です。

また 2005 年より県民への啓発活動「市民公開講座」、2008 年よりウロストーマ患者会「さくらんぼの会」、2009 年より一般医家への啓発活動「高知泌尿器疾患ワークショップ」を開催し、地域貢献も積極的に行っています。

研究では、「試験管内に終わらず、臨床応用できる研究」をモットーに、VHL 癌抑制蛋白の機能解析、前立腺癌の責任遺伝子の網羅的解析、癌での血管新生機構の解明や分子標的治療、光力学機構の解明、尿路上皮癌の尿マーカーの確立に取り組んでいます。国内では東京大学医科学研究所ゲノム解析センターや癌研究会癌研究所、海外では米国テキサス州立大学MDアンダーソン癌センター、フォックスチェイス癌センター、カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校、クリーブランド・クリニック、カナダジャックベルリサーチセンターで研究留学、共同研究を行っています。

幅広い専門領域において、診断から治療まで、一般臨床から先端医療まで、オフィスウロロジストからスペシャリストまで、無限の可能性のある“匠と極”の世界、それが泌尿器科です。21 世紀をリードし世界を見据えた医学・医療を高知より発信してゆきます。これからも泌尿器科を宜しくお願い致します。

《会員からの一言》

## 近況

埼玉医科大学国際医療センター包括的がんセンター頭頸部腫瘍科  
高知医科大学 第 7 期（平成 2 年）卒 中平 光彦

今年の初めに、同窓会会長廣瀬大祐先生より本誌”やまもも”への寄稿の依頼がありました。ふるさと高知を離れた私にとって医大から送られてくるおこう便りやこのやまももを見るのは毎回大変楽しみになっています。そんな貴重な紙面を駄文で汚すのは忍びないと常々思っていますが、小学校以来ずっと同じ学校の先輩である廣瀬会長からの直々の依頼ですので今回私の近況について筆をとらせていただきました。

現在私は、縁あって埼玉医科大学国際医療センター包括的がんセンター頭頸部腫瘍科に勤務しています。当センターは、平成 19 年 4 月に開院した病院です(図：映画チームバチスタの栄光で使用された当センター正面外観)。私は開院とほぼ同時にここで働き始めました。開院以来 5 年が経過し現在全国 388 カ所の地域がん診療連携拠点病院のうち 6 番目に患者数が多い病院となっています。包括的がんセンターに属する当科での私の日常業務は、頭頸部がん患者の診療が主体となっています。毎週 7, 8 件の頭頸部がん手術を行っています。形成外科、歯科口腔外科医と同じチームで治療に当たっており進行がんに対して毎週遊離皮弁を用いた再建手術を行っています。また、自分と同じように頭頸部がん治療に情熱を持った若い同僚の先生に手術の指導をすることも私の大切な役割です。頭頸部領域は音声・嚥下・呼吸など生命活動に直結する領域でありその部の手術は、術後機能とも直結するため大胆さと緻密さを兼ね備える必要があります。毎回理想の手術を追及しています。高知大学時代には切除と再建の両者を担当していましたが、ここでは形成外科医と役割を分担することにより専門性の高い治療が可能となっています。

当センターのある埼玉県は東京都と接しそのベッドタウンとして擁する人口は、平成 24 年 2 月 1 日現在 720 万人(高知県 75 万人の 9.5 倍)と愛知県に次ぎ日本第 5 位です。一方、厚生労働省の 2010 年の調査で人口 10 万人対医師数では最下位です。この

ような地域性から多くのがん患者が当センターに集約され、今後ますます当科の重要性が増すものと考えています。また若い先生にとっても十分な症例にもとづく研修が可能であると考えています。今後ともより良い治療ができるよう日々の手術において研鑽を積む所存です。最後に同窓生の先生方で当院の見学・研修にご興味があればぜひご遠慮なく問い合わせください。

当センターホームページ <http://www.saitama-med.ac.jp/kokusai/>



《会員からの一言》

## 重症心身障害児の世界にふれて

島田療育センターはちおうじ 所長

高知医科大学 第7期（平成2年）卒 小沢 浩

私が働いている島田療育センター（島田療育園）は、昭和36年に日本で最初に設立された重症心身障害児施設です。私は、その初代園長小林提樹の人生にふれ、この世界で生きていこうと決めました。では、その小林提樹のことを紹介したいと思います。

提樹は明治四一年に長野県で生まれました。慶応大学に進学した後、結核にかかります。その時にキリスト教に出会い、洗礼を受けました。大学卒業後、慶応病院の小児科に入り、小児精神衛生相談室の主任になりました。これは今でいう療育外来です。そこで障害児の世界への扉が開かれました。昭和一六年、軍医として満州、沖縄、台湾と行きますが奇跡的に助かり、子どもたちのために捧げようと、更に決意を新たにしました。

昭和二一年に日赤産院の小児科に行きました。戦後の混乱期の中で、捨て子が出てきました。その中には障害児が多くいて、提樹は日赤産院でその子たちの収容を始めます。周りからは「捨て子を育てることは、どうせ不義の子であるからやるべきことではない」と言われます。だけど、提樹は収容を止めません。続けました。当時は食べる物がない時代ですから、収容するのはすごく大変なことでした。そのため提樹は買い出しに行き、食糧の確保にも奔走しました。

昭和二二年に、乳児院・児童福祉法ができましたが、乳児院は健康な乳児を収容して介護するところである。健康保険というのは治癒の見込みのない病気や障害は入院治療に値しないということから、健康保険局は障害児に対して退院させなさいという通告を出しました。数年間の交渉もかなわず、提樹は強制退院を断行せざるを得なくなります。

昭和二五年、小林先生は島田良夫ちゃんに会います。良夫ちゃんの両親と療育園づ

くりを奔走します。そして昭和 36 年に完成したのです。実は、設立前に良夫ちゃんは池に溺れて天国に旅立ってしまいます。でも、島田療育園の設立は継続されました。設立された後も、お金がない、職員がいない、入所希望者は殺到するなどの中、本当に苦労します。そんな中でも、水上勉、秋山ちえ子、伴淳三郎、森繁久弥らの協力で重症心身障害児への理解が深まっていき、法整備がされていきます。

昭和四九年、組合運動が起こっていきます。その組合運動の中、提樹は交渉に疲れ、園を去ります。そして平成五年に脳梗塞によって八四歳で逝去されました。

私は提樹の人生にふれ、改めて自分の道を考えます。仕事をしていると子どもたちの笑顔に触れ、救われている自分に気づきます。この子達に寄り添って生きること、この子達の素晴らしさを伝えること、この子達の住みやすい世の中を作っていくことが、今の私の道なのだと思います。

\* 「愛することからはじめよう」(大月書店) 1680 円を出版しました。小林提樹の生きざまをまとめました。是非お読みください。

《会員からの一言》

## 自己紹介・病院紹介・医師募集



高知医科大学 第8期（平成3年）卒 中谷 裕司

医療法人社団健裕会中谷病院

TEL 079-235-5566 <http://kenyu-kai.com>

e-mail : rijikai@kenyu-kai.com

高知医大を卒業してはや20年が経ちました。高知での6年間は部活のテニスで仲間と汗と涙を流したり、友達とは足摺で潜ったりと、とても充実した日々でした。今でも高知へゴルフに行ったり旧友と飲んだりさせてもらったりと高知は第2の故郷と思っています。私は兵庫県の姫路市出身で、内科を専攻し神戸大学第一内科に入局し、現在は医療法人社団健裕会中谷病院（60床）を運営しています。専門は呼吸器特に喘息・アレルギーです。いわゆる2代目院長ですが、医療の機能分化の流れの中、急性期医療を支える高機能な療養型病院が地域に必要と考えて、すべて医療療養病床に移行し、呼吸器や末期がん、人工透析など内科の高度な医療に取り組んでいます。在宅医療や介護、健診などの予防事業にも力をいれ、在宅療養支援病院の認可を受けています。姫路は、神戸・岡山にも近く気候も温暖でとても暮らしやすく姫路城を代表とする歴史のある街です。姫路市の医療は、5つの中核病院を中心に療養病院や回復期リハ病院が配置されています。しかしながら、医学部のある大学がないため、主に岡山大学系・神戸大学系・京都大学系の医師と一緒に地域医療を支えています。人口に比して医師数が足りないのが現状です。自分は思いがあり2008年より姫路市医師会の理事



になり医療・介護連携検討委員会を立ち上げ現在活動しています。なぜ連携が必要であるかは、医療・介護は警察と消防と同じ社会保障の一員であり、適正な医療・介護の提供こそが医療・介護者にとっての責務であると考えており、地域の医療を守るために医療者が連携して危機的な状況に立ち向かわないと思ったからです。しかし数年前は個々の医療機関ごとにバラバラに動いており、ほぼ全ての医療機関が属している公の医師会のテーブルで連携を進めることが姫路の医療を守るという目的が果たせると考えたからです。現在活動4年目ですが、姫路市統一の紹介状、姫路市統一の5大がん・脳卒中・心筋梗塞後・糖尿病の地域連携パス、医療機能情報の開示など少しずつですが、医師会のテーブル機能を使った顔の見える連携に成果を上げています。更に充実させるには、姫路に1人でも多くの医師が来てくれることを渴望しています。研修医に関しては行政に働きかけた成果として手当が支給されますし、研修病院と地域（医師会、当院も含む）が一致団結して良い臨床医を育てようとはがんでいます。是非高知医大（現高知大学医学部）同卒の仲間が姫路で医療をやってみないかと思っています。よろしくお願いします。また姫路にお寄りの際は、同卒なんで気軽にお声掛けください。（観光を含めいろんな案内をしますので）

《会員からの一言》

## 救急医療に従事し20年

高知医科大学 第8期（平成3年）卒 宮内 雅人

### “挑 戦”

この言葉は現在自分が所属している日本医科大学救急医学教室のテーマである。平成3年卒業と同時に入局し、このテーマ、救命に対して最善を尽くすということを研修医時代から諸先輩方をみて学び、実践してきた。これは初代主任教授の大塚敏文先生が外傷学を確立される中で使われた言葉で、それを実践し集約させたのが国松警察庁長官狙撃事件での外傷外科手術であったと思う。しかし今では救急医療も、先代の山本保博教授が専門であった災害医療から、ドクターカー、ドクターヘリなどの病院前診療、入院後の集中治療など幅広く解釈されるようになった。救急医療は今では高齢化社会におけるセーフティーネットとしての役割として見直されるようになり、さらに東日本大震災が決定的に救急医学の存在意義を高めた。

東日本大震災を自分は医局長として経験した。発災時は大学の近くにおいて、すぐ医局に戻り派遣チームを編成し、1時間以内にドクターカーで出発させた。実は震災2日前に東北で震度5強の地震があったためその時、運転手はだれか、どこに向かうかなど決めていたため非常にスムーズに出発ができた。しかし医局長としてはまずは医局員の安否が心配で、とくに東北地方に派遣病院があるため、福島いわき市、会津若松市の救命センターの無事を確認するのに難渋し、とくにいわきでは津波の影響も心配されたが幸いにも病院は内陸部にあり、被害を免れたが、無事の確認が夜までかかった。医局内で追加の災害派遣のチームの人選、当直体制の変更など事務的作業を行っていたが、数日後さらに問題が生じたのが福島第一原発事故であった。いわきの救命センターが50km圏内にあるため、避難も進言しなかったが、多くの呼吸器付きの患者さんが在院中で、スタッフは離れることができず、孤立状態に陥ることも懸念された。しかし原子力災害ということで国の支援も得られず、自主的に医局内で支援チームを

作り、教室スタッフが現地に向かい、多くの医局OBの先生方の協力を得て呼吸器付きの患者さんを東京まで全員無事に搬送、病院の支援を行った。結局初動は医局長としての仕事に徹したわけだがその後は派遣チームとして気仙沼に赴き診療を行ったが、被災者の方のお話があまりに悲惨で心が痛んだ。医局長として、また医師としてこの震災で多くの経験をしたが、災害はいかに備えをするかがよく言われることであるが、その中身が大切でその施設の状況に合わせた備えをしっかりと行い、発災後は多くの方々、関係機関との連携、情報の共有が大切なため普段から良好な関係を築いておくことが大切であると思われた。学生時代の青春を過ごした高知は東南海地震に備えなければならないという現実がある。大学時代、テストが終わったあとよく仲間と桂浜に行ったもので、大学入試合格電報も「桂浜に満月」という文言で、桂浜に対する強い思いはあるが、震災における津波をみると、これからは違った目で桂浜をみななければならない。今年で卒業して20年たつが未だに当直回数は月10回近くを数える。よく疲れませんかなど聞かれるが、確かに体力的な面の低下は感じることもあるが、救急医療に対しての強い気持ちはまだ変わっていない。ただこの自分のわがままに理解を示してくれる家族にはいつも頭が下がる思いである。いやいや諦められているのかもしれない。こればかりは挑戦するわけにはいかない。

《会員からの一言》

## 近況報告

高知医科大学 第8期（平成3年）卒 渡辺 員支

私は、昭和60年に高知医科大学に入学し、平成3年に大学を卒業後、高知医科大学の産科婦人科学教室に入局し、以後20年間産婦人科医師として従事しております。平成18年9月に母校の高知大学産科婦人科学教室を退局し、愛知医科大学の産科婦人科学教室に入局し、現在に至っております。私は、高知県出身で、愛知県に特に縁もゆかりもなく、愛知県に来るなどとは考えもしていませんでしたが、高知大学産科婦人科学教室で上司でありました若槻明彦先生が、愛知医科大学の産科婦人科学講座の主任教授に就任されたこともあり、愛知医大に赴任することになりました。全然環境の違うところにやってきて寂しいかと思いきや、医局の隣の席には高知医大の同期の篠原康一君がおり、医局の部屋の前の通路をはさんで向こうの部屋は、愛知医大の痛みセンターがあり、そこにはこれまた同期の牛田亨宏君（痛みセンターの教授）がおり、その他にも高知医大の同窓である方々が数名おり楽しく毎日を送っております。また、4月から池本先生が愛知医大の痛みセンターに、ラグビー部の後輩である堀見先生が移植外科に赴任してくることから、高知県人会の歓迎会の話先ほど牛田、篠原両君としていたところでした。お互いにこんなところで会うなんて思ってもみなかったなどいつも笑いながら話しております。人生思ってもみなかったことが起こり、何があるかわからないので楽しいのかもしれない。

さて、今回私がこの近況報告を書くことになりました経過としましては、ラグビー部の先輩であります第6期卒の廣瀬大祐先生から連絡があり、近況報告でもいいので同窓会誌に掲載する文章を何か書くようにとの御指示があり、ここに至っております。近況は先ほども少し書きましたが、愛知に来てもう5年になります。最初は、2、3年ということで来たのですが、大学の中での仕事と、産婦人科の中でも私の専門分野であります周産期部門における学会での仕事も少しずつ増えてきて、なかなか高知に帰

るめどが立たなくなっているのが現状です。大学時代いつも試験は再試ばかりで、成績が極めて悪かった私が、未だ大学に残って、さらに学生や、大学院生の学位指導などを行っているのも不思議なものです。

思い返すに、学生時代つらい再試の日々の中で唯一楽しかったのがラグビー部での生活でした。創部 30 周年記念の OB 会が昨年秋に行われ、諸先輩方や、後輩諸君と久しぶりに会うことができ、大変懐かしく思われました。また、先日たまたま医局で見つけた Doctor' s Magazine の 2 月号に、高知医大でお世話になった岸本誠司先生(高知医大の耳鼻科の講師、手術部助教授を経て、現在東京医科歯科大学の頭頸部外科学教授)がドクターの肖像という稿で掲載されており、大変懐かしく思い出されました。一緒に、ラグビーの練習や試合に出場した、数々の思い出が蘇ってきました。さらにその掲載されているページをめくると、写真の中の一枚に、高知医大のグラウンドでの一枚と思われる写真を見つけました。その中には、懐かしい先輩方や後輩(廣瀬さん、梶山さん、宏洲さん、小沢さん、黒石、今里)の顔が映し出されておりました。あれから 30 年経っておりますから、みんな老けて、だいぶ変化をきたしていることと思いますが、この場を借りて御挨拶させて頂きたいと思います。大変後無沙汰しております。皆さんお変わりありませんでしょうか？また、愛知に来られる機会がありましたら連絡してください。それから、昨年の OB 会に来られなかった方にその模様について報告ですが、みんな体は動かなくなっておりましたが、気持は 30 年前と変わっておりませんでした。ちなみに、辻は相変わらず筋肉バカでしたが、全盛期の体力絶倫からは少しかげりが見えておりました。

同窓の皆さんが母校を離れ、それぞれの土地で頑張っておられることと思います。また、あるところでばったりめぐり会うこともあるかもしれませんが、気がつかれたらお声をかけて頂けたら嬉しく思います。それでは皆様健康には気をつけて頑張ってください。

《会員からの一言》

## 「元気な県庁」へ

高知県総務部職員厚生課

高知医科大学 第10期（平成5年）卒 杉原 由紀

平成19年春より、高知県庁で専属産業医をしています。産業医の仕事は、労働者の健康の保持増進に関すること全般にわたりますが、現在取り組んでいることを紹介します。

職域のストレス状況は一般企業だけではなく公務職場でも同様で、高知県庁においても、さまざま対策に取り組んできました。しかし、残念ながら、職場のメンタルヘルス対策としてこれが有効だった、という手応えを得られるまでには至っていません。

そこで、働きやすい職場をつくることは、その職場で働く職員のストレスを軽減することにつながるのか、一人ひとりの職員を大事にしていくことになるのではないかと考え、職場のメンタルヘルス対策として職場環境改善の取り組みを行うことにしました。

職場環境改善といっても、そんな大がかりなことはすぐにはできない（予算がない）、忙しいのにやる時間がない、面倒くさい、やっても無駄・・・しかし、仕事をする中で、不便だな、困ったな、しんどいな、と感じていることへの気づきを職場環境改善のスタートにしよう、ということで取り組んでみようということに。

毎年人間ドックを受けて自分たちの健康を確認するように、職場も毎年その時にいるメンバーで職場の点検をして自分達で働く環境の改善につなげていこう、ということ

とでこの取り組みを「職場ドック」と命名し、キャラクターも犬（ドック）で名前は「ハタラキヤスクスル（ブル）ドック」。



職場環境の改善は、職場の問題点の改善（ストレスの軽減）を通じて、情報の共有化や職務遂行の円滑化、職場内の相互支援や業務分担の見直し、またオン・オフのバランスをとることによるワークライフバランスの実現等によって、職場の活性化や職場の一体化をめざします。まず自分達の職場の良い点を職場内で共有し、次は改善点を「働きにくさはどこにあるか」「どこを改善すれば働きやすくなるか」「そのために自分達でどんなことができるか」といった視点で話し合い、できることから、特に簡単で手軽にできることから、楽しみながら（ここがポイント!）、取り組んでいく、というものです。

平成23年度は9割以上の課室・所属がこの取り組みに参加し、良好事例もたくさんありました。メンタルヘルス対策としての評価はこれからですが、手応えはありそうです。

「いきいき職場は心とからだの健康から ～「元気な県庁」へ～」をスローガンに、職員一人ひとりが大切にされ、いきいきとやりがいを持って働くことができる職場づくりを目指して、職場環境の改善と職員の心とからだの健康づくりの推進に取り組んでいます。

皆様の職場も、「職場環境改善」への取り組み、はじめてみるのはいかがでしょうか。

《会員からの一言》

## 卒後 18年目となりました

高知大学医学部皮膚科

高知医科大学 第11期（平成6年）卒 中島 英貴

以前“やまもも”に原稿を書いたことがあります。あれから10年程経ったように思います。その時は、医師として色々悩むことも多く、自分の未熟な部分を吐露しました。同級生も読んでくれて、久しぶりに連絡をくれたことを覚えています。その後ほとんどを大学で過ごしてきましたが、以前から知っている先輩の先生方はもちろんのこと、後輩の先生方も少しずつ増えてきて楽しくしております。

一人前に結婚もして、子供を育ててみると、自分が子供時分の親や周りの大人達がいかに私に寛容であったかが分かります。甘やかされて育ったためか、今でも人の善意をあらかじめ当てにする悪い癖があります。最近子供から「どうしてお父さんはそんなにお気軽なの？南海地震がきたら生き残れないよ。」と説教をされますが、子供から見るとどうも父親としては頼りないようです。

私は高知県外で生活したこともありますが、心から落ち着いて生活できるのはやはり生まれ育ったこの場所だけです。グローバル時代に何とローカルな人間なのでしょう。山と海と慣れ親しんだ食べ物ともちろんお酒があれば、死ぬまで満ち足りた人生を送れそうです。

日々の仕事として、皮膚科をしています。今でも新しい発見があれば迷いもまた生じます。長い期間みていると元気だった患者も年老いてきますが、自分が研修医の時にした治療がどういう結果になっているかが分かります。駄目もとでやったことが命を救ったり、自信を持ってしたことが恨みを買ったりで、「論文などはほどほどに信じたほうがよい」と恩師に言われたことが身に沁みます。

今年は、高知に残る研修医の先生が30人ほどおられるようで、未だかつてない盛り上がりを見せてくれると思います。高知で学び、医者になったのも何かの縁ですか



ら、このつながりを大事にして素晴らしい人生を歩んでいかれることを期待しています。



《会員からの一言》

## 命に携わる小児医療

高知医科大学 第 12 期（平成 7 年）卒 高杉 尚志

みなさん、ご無沙汰しております。高知医大 12 期生の高杉尚志です。今年 3 月に高知大学医学部小児思春期医学教室（小児科）を辞めて、5 月から岡山県総社市の実家の近くで小児科クリニックを開業すべく準備中です。

高知医大 6 年生、24 歳の時に「幼い命がかかわることができ、やりがいがある」「どんな疾患も診ることができる」「子どもが好き」そんな気持ちで小児科医になることを決めました。そして、高知医大小児科教授であった倉繁隆信教授の人柄と小児科医のオーラに、直感的に運命的なものを感じ、「この先生の下で小児科を学びたい」と切望して入局しました。一般小児がある程度診られるようになった小児科医 6 年目の 2000 年春、その倉繁隆信教授は胆管癌で亡なられてしまいました。その後、医局を引き継いだ脇口宏教授の下、「子どもの命を大きく左右する分野だから」という思いで、小児循環器の研鑽を積むべく、国立循環器病センターへ 2 年間国内留学させていただきました。そして、小児科医 10 年目の 2004 年から母校の小児科に戻り、現在まで、小児循環器分野を牽引して、母校の臨床、教育、研究に邁進する充実した日々を送ってきました。母校小児科での診療は歯がゆい思いをする事も幾度となくありましたが、一歩でも先の小児循環器医療と「命に携わる小児医療」を高知の子ども達に提供できたと思っています。しかし、一方で、急性期、高度医療だけでは、現代の経済優先の不自然な世の中では子ども達は幸せになれない事もよく分かり、強烈な危機感が募ってきました。そして、地域の子ども達を近くで診療しながら、「子どもの健康と幸せを実現」する事で、この社会を良くしたい、子ども達に幸せな未来を残したいという思いで、小児科開業医として再出発する決意をしたわけです。

今後ともよろしく申し上げます。



高杉こどもクリニック

〒719-1125 岡山県総社市井手 585-1

TEL: 0866-92-8839 FAX: 0866-92-8840

HP: <http://takasugi-kodomo.com/>

E-mail: 8839@takasugi-kodomo.com

## 《同窓会事務局から》

### 同窓会総会・講演会および懇親会への出欠のお返事をお願い

先の頁でご案内していました総会・講演会および懇親会へのご出欠のお返事を FAX (088-866-0034) またはメール ([dosokaij@kochi-u.ac.jp](mailto:dosokaij@kochi-u.ac.jp)) にて平成 24 年 7 月 10 日 (火) までにご連絡下さい。

また、FAX でのお返事は前頁の【総会・講演会および懇親会】の用紙をご利用下さい。宜しく申し上げます。

日時：平成 24 年 7 月 28 日 (土) 午後 5 時から

場所：ホテル日航高知 旭ロイヤル

懇親会参加費：5,000 円

### 住所連絡のお願い

住所の変更がございましたら前頁の【住所変更連絡欄】の用紙にて FAX 又はメールにてご連絡下さいますよう宜しくお願いします。

年々、連絡の取れない方が増えています。今回の発送物が届いていない方がお知り合いの中で居られましたら事務局にお知らせいただくようお願い下さい。

### 同窓会費納入のお願い

未納入の方は下記口座への納入をお願いします。

年会費 1 万円、計 5 万円にて終身会費となります。

【会費振込口座】 郵便局からのお振込

口座番号：01680-2-130874

高知大学医学部医学科同窓会

他の金融機関からのお振込

店名：一六九店 (イチロクキュウ店)

預金種目：当座

口座番号：0130874

高知大学医学部医学科同窓会

## 医師賠償保険団体加入のお知らせ

医学科同窓会で勤務医師賠償責任保険を団体扱いで損保ジャパンと契約をしています。現在、約 200 名の加入者があり、保険料について団体割引 10%（平成 23 年度）の適用を受けております。

詳細につきましては下記取扱店までご連絡下さい。

契約型	対人 1 事故につき	対人 1 年間につき	保険料(団体割引 10%)
100 型	10,000 万円	30,000 万円	45,747 円
150 型	15,000 万円	45,000 万円	51,975 円
200 型	20,000 万円	60,000 万円	59,418 円

### 【取扱代理店】

はらだ保険企画

〒780-0063 高知市昭和町 10 番 5 号

TEL : 088-823-7152

携帯 : 7090-1007-8339

E-mail : [daiwa-si@dion.ne.jp](mailto:daiwa-si@dion.ne.jp)

担当 : 原田

### 【同窓会会費振込先】

郵便振替口座 ; 0 1 6 0 - 0 - 3 5 1 5 9

高知医大卒業生同窓会

### 【事務局連絡先】

高知大学医学部同窓会

〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

TEL/FAX : 088-866-0034

[dosokaij@kochi-u.ac.jp](mailto:dosokaij@kochi-u.ac.jp)

<http://www.kochi-ms.jp>